
書 評・紹 介

芦田みどり編

『ジェンダー医学：＜高齢化＝女性化＞時代に向けて』

金芳堂・2003年・vi+193

「女性外来」という言葉を見聞きする機会が日本でも増えてきた。生物学的な仕組みに様々な男女差があるという、考えてみれば当然の事実に着目した医療であるが、もう一つ重要な点として、男女の社会的文化的な差異（ジェンダー）が考慮されている。そして、たとえ専門医であっても、異性であれば話にくいこと、共感しにくいことなどがあるという、やはり当然のことに真正面から取り組んでいる。また、問診に時間をかけ、臓器別専門医療ではなく、ライフステージの中での人間そのものを診ようと試みる。言うなれば、性差への着目に端を発する、医療の波が起きているのである。女性外来の隆盛を見れば、高いニーズが存在することは明らかである。それは医療の重要な動きではあろうが、一体なぜ『ジェンダー医学』を『人口問題研究』で紹介するのか訝しがり、一般的な人口研究者には無縁の書だと思う人も多いだろう。

ところが、本書の内容は人口学的な視点が強く打ち出され、また、ジェンダー医学の研究意識は人口問題に直接関わってくるのが本書では明らかにされている。まず、第Ⅰ部「人口の高齢化とその問題点」では、人口学者により人口学的にジェンダー医学の課題が詳らかにされる。第1章では、高齢化を続ける日本人口は、女性割合の増加（人口の「女性化」）の過程でもあることが示され、第2章では、少子高齢化と価値観の変化について、出生、結婚、性行動、介護、労働という観点から概観されている。ジェンダー医学に見る女性の問題は、今後ますます重要になり、人口学でも見過ごすことのできない課題となる。

本書の残りの部分でも、人口の「質」の問題に様々な切り口から焦点が当てられる。第3章から6章までの第Ⅱ部「高齢化における身体的・社会的性差」では、高齢化の性差について、老化、健康寿命、健康の社会的要因、そして介護という側面から記述、分析や展望がなされる。第Ⅲ部では「女性の社会的健康と社会保障」と題して、ライフコースや社会構造から見た仕事・家庭・健康の関連、労働組織での問題、女性の市民権、世代会計による分析からみた医療給付の男女差といった課題について分析される。年々高まる人口学と社会保障の密接な関係に対する認識を、ジェンダーという視点から確認している。第Ⅳ部「女性政策の国際比較」では、主にジェンダー医学をめぐる歴史的な背景と意義が、日本、アメリカ、そしてEUの事例から語られる。

最後に第Ⅴ部「性差研究の方法論と政策課題」では、性差研究のための政策的な課題について明らかにされ、この重要なテーマの研究を振興するための提言がなされる。この提言にはきわめて現実的で実現可能性の高いものや、費用は高価だが効果の高いものがあり、早急な実施が望まれる。とりわけ、老年人口が急速に増加する日本では、高齢者の縦断調査による研究が生み出す知識が、医療的にも、社会的にも、人口学的にも、緊急に求められていると言える。その知見は、日本社会の将来を左右するばかりでなく、高齢化が進む世界全体に役立てられるものとなろう。

ジェンダー医学のもう一つの軸であるべき男性の問題は、今後の課題とされている（p8）。本書『ジェンダー医学』に見るような、包括的な分析が早急になされることを期待する。（小松隆一）